アメリカ体育振興協会期（1885-1903年）の体育専門職をめぐる論議： 医学博士取得会員と体操教師会員との抗争とかかわって

小田切 毅 一

The discussion for the physical education profession at the period of the AAPE (1885-1903): with reference to a dissension between members who have taken a medical degree and members of gymnastic teachers

Kiichi Otagiri

Abstract

The purpose of this paper is to ascertain the progress of the discussion for physical education profession at the period of the American Association for the Advancement of Physical Education (AAPE, 1885-1903).

Dr. L. H. Gulick's suggestion is regarded as an oldest opinion in those days. His "A New Profession," which has published at the fifth annual meeting (1890), become the object of attention. He advocates firmly that physical education profession must be intrinsically a broad, scientific, philosophic field, and also as one of the departments in education.

Taking advantage of this suggestion, some discussion has been made. After that, following three problems of association are proceeded further. First problem is to suggest a list of valuable books and articles on physical education. Second problem is to suggest a list of studies for this profession corresponding to the studies of the medical school. Third problem is to suggest a degree which is a suitable one for this profession.

The discussion of physical education profession has reached its climax in 1899, at the 11th annual convention. Noticeably, with relation to above third problem "a suitable degree", the resolution suggested by the executives has made a thorough revision as follow.

"(1) It is contrary to the best interests of physical education for teachers of gymnastics and directors of physical training unless they have had special preparation, to profess or be expected to serve either as experts in school hygiene or as practitioners in Mechanotherapy.

(2) A medical degree in itself cannot be considered as a sufficient qualification for a position as director of physical training or teacher of gymnastics.

(3) A professional course of training is a necessary qualification for the teacher of gymnastics or director of physical training."

Above-mentioned progresses of discussion prove that the members intend to give academic status of physical education upon the basis of medical science. This progress of discussion, on the other hand, shows an inevitable step of dissension between small number of members who have taken a medical degree and large number of gymnastic teachers, preferably experts of practical gymnastic instruction.

This dissension is closely bound up with the plan of teacher training and/or the certification of gymnastic teachers. Some members who have founded normal gymnastic school themselves carry their opinionated leadership into the establishment of physical education profession. Their opinions

have an inclination to urge the specialization of physical educator. This may be given as a conclusion that the discussions of the general nature of educator rather recede than assist the discussion of the proper nature of physical educator.

Key words: AAAPE, physical education profession, medical degree, gymnastic teacher

(Japan J. Phys. Educ. 41: 1-10, May, 1996)

キーワード：アメリカ体育振興協会、体育専門職、医学博士、体操教師

1. 本研究の目的と方法

本研究は、アメリカ体育振興協会期（1885-1903年）に同協会が生じた、最も初期の体育専門職に関する論議に着目しつつ、この論議が、この専門職にとってむしろ宿命的な、医学博士を有する会員とそれ以外の体操教師との間の抗争とかかわって、展開されたことを明らかにしようとするものである。

アメリカ体育振興協会^{注1)}は、アメリカ最初の体育の職能集団である。この協会に参集した会員集団を核に、いわゆるアメリカ体育界がひとつの実像として歴史上に登場することになった。ちなみに20世紀への転換を意味する1900年当時には、体育振興協会の会員集団は、大学などの高等教育機関やYMCA 機関に所属していた130名程度の医学博士を「核」とする、総勢でおよそ700-800名程度の集団だった（小田切²⁴⁾ p. 3）。

体育専門職の確立にかかわるこの団体のその後の歴史的経緯や評価を前提に、これまでこの協会の規約の改訂や組織的拡大、あるいは活動の拡充そのものを、体育専門職の形成を裏づける歴史的諸事実とみなす説明がなされてきた^{1,4,10-12,14)}。しかしながらこうした説明にもかかわらず、専門職にかかわるこの論議の発端ともいうべき、初期における内容やこれに伴う両者の葛藤に関しては、これまで考察の対象とされてこなかった。

この課題を達成するために、史料として、1885年から1895年までの同協会の大会（年次集会）や総会に関する「報告書」（「会報」）と、これを引き継いで1895年以降に刊行されるようになった定期刊行物「体育レビュー」を用いる^{注2)}。

2. 新タイプの教育専門職の提案とその波紋

アメリカ体育振興協会で、最初に体育専門職に関する具体的な論議を提供したのは、L. H. ギューリックである。第五回全国大会（1890年）における「新しい専門職」がそれである（Gulick³⁾ pp. 59-66）。彼がこの種の話の最初の提供者となったことは、決して偶然ではない。

当時の彼は、スプリングフィールドのYMCA 訓練学校に体育部が設立された1887年から、この部局のヘッドとして就任しており、いわゆるYMCA 体育の改革を手がけていた。この改革は一言で、YMCA の理念と調和した、完全なクリスチャンの性格を志向する宗教部門と体育部門の事業のありかたにかかわるものであった。

彼は、体育振興協会の第六回大会（専門職に関する話題を提供した翌年）に、このYMCA 体育の改革に言及する「YMCA における体育（Physical Education, 以下 P.E. と略記）」を報告している（Gulick²⁾ pp. 43-47）。ここでは、①YMCA 望まれる体育の位置づけ、②望ましい体育指導者像、③全体としてのこの組織の構造や特性の問題が言及され、「体育館が協会の三つの部門、すなわち身体と心と精神とからなる協会事業の一つ」であることが強調されていた（Gulick²⁾ pp. 47）。

L. H. ギューリックは当時の体育家の誰よりも、専門職としての体育指導者像を提唱する必要性を、切実に感じていた人物であった。YMCA 体育に携わって、YMCA 体育部門を担う体育指導者が、第一にクリスチャンであるべきであり、第二に良い教師としての資格を持つべきだと主張していた彼の立場⁸⁾が、アメリカ体育振興協会内においてもいち早く専門職に関する話題提供をさせたとみてよい。

彼は「新しい専門職」の冒頭で、まず体育専門

職に対する一般の人々の認識に触れ、「知的な人々の間にすら、我々が従事している仕事のあり様について、非常に一般的な誤解があるように思われる」と述べている。そして「単なる医学におけるひとつの専門分野」とか「運動競技の一部局」とか、あるいは「筋肉組織の増強に時とエネルギーとを費やす人」と考えられている現状を、批判的に受け止めていた (Gulick³⁾ p. 59)。

彼はまた、体育家が広く活躍する三分野を考慮していた。そして「教育運動 (Educative Exercises)」「治療運動 (Curative Exercises)」「気晴らし運動 (Recreative Exercises)」という、各々の分野の課題に通じて「運動目的」論と関連づけるかたちで、その専門職像を描こうとしていた。

これらのうち、特に詳細に言及した「教育運動」とは、「身体のパワーを引き出し、訓練すること」や、「いかなる天職や職業にも、いかなる人生における活躍や有益な行ないにも備えて、身体を準備し適性をつくること」を課題とするものだった。彼はこれを「教育のねらいをもって鍛錬的に、ある意味では強制的に行う運動」でもあると述べ、「体育 (P.E.)」という言葉にも言い換えて用いていた (Gulick³⁾ pp. 62-64)。

この「体育」 (=教育運動) の課題は、次の10語によって要素化されていた。①筋力 (Muscular Strength), ②耐久力 (Endurance), ③敏捷性 (Agility) または行動の俊敏さ, ④筋支配力 (Muscular Control), ⑤身体判断力 (Physical Judgment), ⑥自己制御力 (Self-Control), ⑦身体的勇氣 (Physical Courage), ⑧調和 (Symmetry) または身体の全面発達, ⑨優美さ (Grace), ⑩身体での表現 (Expression) (Gulick³⁾ pp. 60-62)。

彼は、これらの体育の課題を担う体育家が、固有な科学的な業績を提供する新しいタイプの専門職であるはずだと強調していた。「この点については、ですからこの専門職は、新しいという点で他の専門職とは異なったものであり、また専門職にとって単にオリジナルだけなのではなく、世界にとってもオリジナルとなるその科学的業績を行うように期待されるものであります (Gulick³⁾

p. 64)。」彼はこの科学があまりにも若すぎるけれども、この体育専門職による研究成果は広く一般の人々に影響を与えるに違いないと、むしろ楽天的な見通しを持っていた。

同様に体育の専門科学に関しても「心理学、解剖学、生理学、歴史、それに哲学を通じて、人間についての奥深い知識を…知的活動のための大きくて広い分野を、学生達に提供する」と述べていた。固有な科学的業績を提供するこの体育専門職は「本来的には広い、科学的で哲学的な分野なのであり、また国民を築き上げるのに基本的な、教育における部局のひとつと考えることによって (Gulick³⁾ p. 65)」人々に理解されるはずであった。

重要な出来事は、話題発表後のフロアーからの発言を集約するかたちで、以下の三課題を達成するために委員会を指名するという主旨の「提議」がまとめられたことであった。第一の課題は、体育に関する価値ある本や論説の一覧を示すこと。第二は、医学校 (medical school) の研究に対応する体育専門職にふさわしい研究業績の一覧を示すこと。そして第三は、この専門職にとって妥当と判断される学位を提案することであった⁷⁾。

これらの課題は、その後の協会活動に反映されていた。たとえば第九回大会 (1894年) の「体育史並びに体育文献部会」をみても、「体育 (Physical Training, 以下 P.T. と略記) の歴史や文献の研究が、体操教師の専門的養成のどのような根拠や広がりをもたらすか」といった問いかけを含む、体育に関する文献目録作成への問題の討論が積み上げられていた⁶⁾。

専門職にふさわしい文献や研究業績を収集・整理する協会としての取り組みは、協会の組織再編がなされた1895年以降には、各傘下体育団体の活動へと継続されていた。これらの活動は言うまでもなく、1896年に機関誌「レビュー」の刊行がなされたことによって飛躍的に充実していた。特に体育史にかかわる研究業績が「レビュー」にしばしば掲載されており、体育の学問的ステータスを確立しようとしていた当時の要請を反映していた。

L. H. ギューリックの話題提供は、このように周囲に波紋を投げかけていた。第六回大会(1891年)における、サージェント(D. A. Sargent)の「体育(P.T.)の指導は一般職か、それとも専門職か」もこの例外ではない(Sargent¹³⁾ pp. 6-24)。彼の発言は、前回の大会で反響が大きかったL. H. ギューリックの専門職に関する話題と関連づけながら、むしろ器具や用具考案の利害と関連する体育器具・用具の商品化をめぐる問題を意識したものだだった。

彼は、特に器具や用具の改良が専門的知識に裏づけられながら進歩した経緯を、運動競技熱の高まりに匹敵する体育現象の隆盛とみなして評価していた(Sargent¹³⁾ pp. 6-24)。そして運動競技の実践から締め出される大多数の一般の人々に、徒手運動や、家庭でも実施可能な、器具や用具を用いた軽い運動を薦めるのが体育家であり、それ故に「専門職の誇り」を持たなくてはならないと強調していた。この場合の「専門職の誇り」は、商業主義の利潤追及に基づいた一般的職業としての製造業者の気質と、明確に区別されるべきものであった。

3. 妥当な学位とその専門職の性格規定をめぐる論議の決着へ

1898年の「体育レビュー」(12月号)には、第十一回全国大会の予告プログラムとして、次のような前文と決議の部分からなる「執行部案」が掲載されていた¹⁹⁾。まず「前文」として、「筋肉運動は、健康の促進や回復に付随する価値あるものであり、役に立つものである。学校という職場におけるその究極の原理は、治療的なのではなく教育的・衛生的なのである。また系統的な身体訓練は、教育的な躰にかかわる必要かつ不可欠な形態と考えられ、系統立てられるべき最も重要な主張を有しているのである。従って以下の決議をする。」

そして「決議部分」は次の通りである。「仮に体育家が医学博士の学位をもっていないのであれば、学校衛生における専門家としても、メカノセラピー(mechanotherapy^{註3)})における開業医と

しても、いずれの役目をも果たすと言明したりそのように期待されることが、体操の教師(teachers of gymnastics)や身体訓練の指導者になっていないのである。また体育(P.T.)のもっとも望ましい関心とも矛盾するのである。」

この「執行部案」では体育の専門職が、医学博士の学位と密接な関連を持つことを前提に考えられていた。体育専門職と医学博士との関連づけは、前述のL. H. ギューリックの「新しい専門職」の提案を契機に、彼や彼の周囲にいた評議員や役員達に一層明確に意識されるようになっていた。こうした両者の関連づけは、しかしながら、医学博士の称号をもつ一部の会員^{註4)}と、それ以外の多数の会員との間で抗争をもたらすことにもなった。傘下体育団体の間では、早速この案文への事前の検討がなされていた。たとえば「ニューヨーク体育団体」の場合は、1899年1月の定例集会で、「医学の卒業生と、体操の教師と、医療行為ができる体操家(期待される体操家像:筆者)との間に存在すべき関連とは何か」が討論された。この討論では多数の会員が、それら三者は異なる領域で別々の方法によって養成されるべきであり、互いに他の領域を侵略すべきではないと考えていた。

彼らの討論でむしろ注目すべきことは、医学の専門職にある人々が身体運動の効果には無知であるという指摘や、体操の教師の一部に十分な訓練を受けていない者がまぎれているという指摘がなされていたことであった。こうした中でバンクロフト(J. H. Bancroft)女史が精力的に発言し、体育の専門職と医学博士の資格とを関連づけた「執行部案」に反対を表明し、周囲の人々から支持を得ていた²⁰⁾。

全国協会でも、傘下体育団体からの反響に対応すべく、自らの執行部案に再検討が加えられていた。上述のニューヨーク体育団体の定例集会1ヶ月後に開催された全国協会の評議会では、「学校衛生を担当する専門家でもあるような体操インストラクター(Gymnastic instructor)」を具体的な専門職像とみなすような論議がなされ、さらに執行部案に次のパラグラフを加えて修正するこ

とで意見が一致していた。

「医学博士はそれ自体が、身体訓練 (P.T.) の指導者や体操教師の地位のための十分な資格とみなすことはできない。専門的な養成課程が、体操の教師や身体訓練の指導者のために必要な資格付与を行うのである²¹⁾。」当時の史料からは、この「執行部案」の修正が、支部からのどのような反論に対応したものであったかを具体的に確認できなかったが、会員の間に広がりつつあった体育専門職にふさわしい学位への問題関心は、このような修正を伴った上で正式に第十一次全国大会にかけられることになったのである。

第十一次全国大会（1899年）では、最初に発言者に予定されていたテイラー (H. L. Taylor) が欠席したため、フィッツ (G. W. Fitz) が彼の原稿を代読するかたちで会議が開始された。学校における体育 (P.T.) の重要性や、その要求の正当性に言及した彼の発言は、執行部側の見解にも十分同調するもので、学校体育が教育的・衛生的な目標を持つべきだと明言するものだった⁽¹⁷⁾ p. 157)。

注目すべきことに、彼はまた、教育的でインストラクターの資質を兼ね備えているような現場実践的な体操教師 (gymnastic teacher) に、医学的な学校衛生の任を負わせることを、彼らの専門的教養の水準から不十分と考えていた。それ故に体操教師の専門的な科学的知識として、一層生理学や衛生学に論拠を求めることが必要であると、再三強調されていた。

ところで大会当日の体育専門職に関する論点は、決議案の前文中に、いわば公的に表記されていた「メカノセラピー」という、むしろ整形外科の領域で用いられていたこの用語を、体育の専門職とどのように関連づけて規定するか、といった問題とも基本的に関わって展開していた。

エネブスケ (D. J. Enebske) の発言によると、この用語は、広義に「整形外科学」として理解されている「様々な器械装置による病気の治療」の意味、すなわちこの種の器械装置の考案者ツェンダー (J. G. W. Zander) に由来する「ツェンダー・システム」と呼ばれる器械療法的方式^{注5)}と、

狭義の「用具を手段にしてなされる運動やマッサージによる病気の治療」の意味に二分されるものだった。

彼の発言の中では、狭義の意味での運動療法的にマッサージや運動を用いる専門職（整形外科医や運動療法士など）が注目され、さらにこれと教育的にマッサージや運動を用いる専門職（体操教師や体操インストラクター）とが対比されていた。そして「執行部案」において「医者役割と教師役割との間に境界線の混乱」が生じていることを指摘し、両者のその境界線を正そうとしていた⁽¹⁷⁾ pp. 159-163)。このように両者を別個なものとして区別する意見は、むしろこの会議では多数派に属していた。

「執行部案」を最も明らかに感情的に批判したのは、J. H. バンクロフト女史であった。「最初のパラグラフは、体操が学校衛生の一部門であると明白に述べています。第二のパラグラフは、医学博士の資格のない者は誰も、学校衛生の専門家として勤めることを期待されず、あるいは専門的職業につくべきではないということを宣言しています。医学博士でない体操の指導者や体操教師はあり得ないということを明言する声明です。考えるに、余りにも本末転倒です…⁽¹⁷⁾ pp. 163-164)。」

彼女はむしろ、専門職を学校衛生の部門ではなく、教育の一部門とみなしており、教育現場に直結した指導にかかわる問題意識を最優先していた。例えば午前の会議で、傘下体育団体の現状や展望について情報交換をしていた時にも、体育の教科を単に体操だけでなく、遊戯やゲームを含めた「広い感覚」で捉える必要があることや、どの学年にどの位の時間を与えるかについてもはっきりしていない現状などを指摘した上で、これら実践的問題を検討する委員会を提案するなどしていた²³⁾。

彼女は、激情したその発言の最後に、決議案の修正を要望し、ニューヨーク体育団体の会員の支持を得ていた「代案」を提示した。これは「前文」に続けて、次のように決議表明をするものであった。「(決議 1)：体育 (P.T.) への関心は、体育

教師を特別に任用して、衛生に関連する必要な知識とか視力テスト等への配慮、そして一般的な教育の原理や実践への一層充分な配慮を強調することによって守られる。(決議2): もしも彼らが特別に任用されないのであれば、メカノセラピーを実践するように振るまったり、あるいはそう期待されることは、体操教師や身体訓練の指導者になう体育の最も望ましい関心と矛盾する⁽¹⁷⁾ p. 174).」

後を継いだニッセン (H. Nissen) は、学校衛生に関する意見では J. H. バンクロフト女史に同意できると述べた後で、この「メカノセラピー」分野の専門性を、体育の専門職のそれと区別して捉えることが必要だと指摘していた⁽¹⁷⁾ p. 174)。彼は区別すべきものを区別していない協会決議案を批判し、上述のニューヨーク体育団体の「代案」の最後に次の一文を加えるかたちで、その発言を結んでいた。すなわち「その結果体育は、臨床的な医者忠告によって存在するものとなるでありましょう⁽¹⁷⁾ p. 176).」

議論が展開する中では、原案作成側の G. W. フィッツは、特に J. H. バンクロフト女史の発言に次のように反論していた。「バンクロフト女史は、我々のいわゆる専門家と呼ばれる多くの人々が引き合いに出される際に、…学校の状況に関する研究の真に生産的な業績の少なくとも9/10が、教師によってではなく、とりわけトレーナーではなく、学校医によってなされてきているということを認識なさっていない⁽¹⁷⁾ p.178).」この反論は、現場実践的な「トレーナー」であると同時に「学校医」でもあるような、学校衛生の専門家としての体育専門職の性格を重視した発言であった。彼は現実に職場を持っている多くの体操教師、いわゆる体操インストラクターの立場を確かなものにするために、衛生部門と関連づけられた学校における彼らの地位の確保が重要だと考えていた。

いわば教師としての体育専門職の性格を重視する J. H. バンクロフト女史は、しかしながら一貫して決議案の修正を要求し、修正することを通じて討論における全てのわだかまりの感情をなくし

たいと発言し、修正を早急に行い、翌日の会議でも引き続きこの討論を続けるべきだと反論していた。

論議の総括は、いったん「決議案作成委員会」に一任された後、その日の午後の討論終了時に議長から「案文」が提出されていた。そしてその案文を採択することによって、以下の「決議」が成立した。まず「前文」については、執行部案の文面がそのまま生かされていた。その上で「決議」は、以下の三項目が箇条書きにされていた。

「(決議1): 体育家が特に任用されない限り、学校衛生における専門家としても、メカノセラピーにおける開業医としても、彼らはいずれの役目をも果たすと言明したり、そのように期待されることはないのであり、体操教師や身体訓練の指導者になっていないのである。また体育の最も望ましい関心とも矛盾するのである。(決議2): 医学博士はそれ自体が、身体訓練の指導者や体操教師の地位のための、十分な資格とみなすことは出来ない。(決議3): 専門的な養成課程が、体操教師や身体訓練の指導者のために必要な資格付与を行うのである⁽¹⁵⁾ pp. 198).」

以上のように体育専門職に関する論議は、その前提に医学博士を強く意識した論議でもあった。その決着は、体操理論を身につけた体操インストラクター(体操教師)の教育的役割に着目し、メカノセラピーや衛生学といった医学に準拠する学問的ステータスに基づいて自らの職業を専門職として高めようと考えた、協会執行部の意向に方向づけられるものになっていた。医学博士であり、それ故に先導的な立場にいた一部の体育家と、多数の現場実践的な体操インストラクター(体操教師)との間に必然的に抗争がみられたが、論議は体育専門職を、特別に任用され専門的養成課程によって必要な資格付与がされるような、固有な教育専門職として位置づけることによって合意をみせていた。

4. 体育教師養成計画や体育教師の資質論との関連

体育専門職に関する論議の決着は、言うまでも

なく、これと前後するかたちで論議された「体操教師の資格付与（検定もしくは養成計画）」⁽¹⁶⁾ pp. 179-190）と密接にかかわりをもつものだった。この「検定」もしくは「養成計画」は、第十一回大会で取上げられて「九人委員会」が結成され、次回第十二回全国大会（1901年）で検討の成果を報告することが決定された⁽¹⁶⁾ p. 190）。

第十二回大会での「九人委員会報告」⁽²²⁾ pp. 221-225）は、入学資格と学習課程にかかわる内

容のものであり、「師範学校部門」で報告されていた。その骨子は以下の三つに大別できる。まず第一の部分は、ハイスクール卒業程度の学力を有する入学者のレベルや条件や推薦など、望ましい志願者に関する内容であった（第一条から第七条までの部分）。第二の部分は、年間30週からなる修業期間二年と三年とについての各々の教科課程についてである。また身体訓練の歴史や訓練理論としてのキネシオロジーなどをはじめとする専門

表 A 「九人委員会報告」各条の要約一覧

第一 部 分	第1条 ～第7条	<p>入学者にはハイスクールの教育水準もしくはそれと同等の学力が要求される（第一条）。</p> <p>志願者には（ハイスクールにおいて）物理学、化学、数学、そして生物学の習得を勧めるべきである（第二条）。</p> <p>志願者には平均的な健康や筋力が要求される（第三条）。</p> <p>体操による事前の訓練をしていることが望ましい（第四条）。</p> <p>入学を志願するには、本人の特性や適応力を保証する、教師や責任ある人物による二人の推薦者が最少限必要である（第五条）。</p> <p>18歳以下の入学は認めない（第六条）。</p> <p>入学を希望する生徒に「見習い」を許可する（第七条）。</p>
第二 部 分	第8条 ～第13条	<p>修業期間は二年間の研究と訓練の課程とし、少なくとも年間30週が準備されるべきである（第八条）。</p> <p>出来れば三年の課程が望ましいと考えられる（第九条）ので、実施可能であれば三年課程に引き延ばされるべきである（第十条）。</p> <p>体育師範学校で開設されるべき科目と時間数は次の通り（第十一条）。</p> <p>○二年課程の科目と時間…①音楽および声の訓練=45時間、②物理学=30時間、③化学=60時間、④解剖学（顕微鏡使用など）=90時間、⑤運動生理学=90時間、⑥個人衛生および応急手当=45時間、⑦人体計測学や身体検査や診断・運動処方=90時間、⑧身体訓練の歴史と身体訓練の理論（特殊キネシオロジー）=100時間、⑨教育学および心理学=90時間。</p> <p>○三年間課程の科目と時間数…①マッサージ、医療体操および体操の臨床的応用=180時間、②病理学=45時間、③上級運動生理学および実験生理学=100時間、④学校管理（school government）=12時間。</p> <p>なおこれらの時間配分については、一週につき25時間は体操の理論と実践とに割り振られるべきである（第十二条）。</p> <p>理論的な学習が、一週につき12時間程度は必要である（第十三条）。</p>
第三 部 分	第14条 ～第18条	<p>教師のグレードとして、「インストラクター」（Instructors of physical training）と「マスター」（Masters of physical training）の二つの名称が示されている（第十四条）。</p> <p>これらの資格の付与は、「全国評議会」（National Council）もしくはその評議会によって指名された委員会によってなされる（第十五条）。</p> <p>「インストラクター」の資格は、上記の科目や時間数の条件に該当する師範学校の卒業生がこの資格に値する（第十六条）。</p> <p>五年間体育を指導した経験を持つ教師もこの資格に相当する（第十七条）。</p> <p>「マスター」の資格は、「インストラクター」の資格にさらに三年間の充分な経験と、このオリジナルな業績の二つの分野についての三千語程度の副専攻の学位論文、ならびに少なくとも八千語以上の主専攻の学位論文が必要である（第十八条）。</p>

科目群と、それらの時間配分などについてである（第八条から第十三条までの部分）。第三の部分は、体育教師としての二つのグレード（インストラクターとマスターの名称による）とそれぞれの卒業論文など、卒業資格条件に関する内容であった（第十四条から第十八条までの部分、個々の条項の要約は別表 A. を参照のこと）。

「九人委員会」のこの報告は様々な論議を呼んだ。例えばボストン師範学校のホーマンス（A. M. Homans）女史は、報告中に触れられていた18歳以下の者の見習い期間の必要性を改めて力説し、提案されたカリキュラムの内容の豊富さを支持していた。またアーノルド（E. H. Arnold）やボーリン（J. Bolin）は、解剖学や生理学は外科医の立場からではなく、体育にかかわる応用科学の立場から教えられるべきだと、医者解剖学を削除するように主張していた。

彼らがこの体育教師の資格付与の問題に関心が高かったにもかかわらず、その内容を医学とは別個な、出来れば専門的で高水準なものにしようとする意向が明白だったにもかかわらず、この資格付与の計画はその後具体化されなかった。実際この計画で提示されていた三年課程に注目しても、すでにその1-2年前に一部のカレッジや大学で開設されるようになっていた四年課程と比べると、時代を先取りする意味を持ち得ていなかった。ちなみにアメリカ体育振興協会期の末期に相当する1903年現在のものとして、ハンナ（D. Hanna）によって調査された体育指導者養成機関は、全部で16に過ぎなかったが、カレッジや大学における機関開設の傾向は、1895年以降にはここでも明白になっていた⁷⁾。

協会がこの計画を、それ以上積極的に具体化しようとしなかった最大の理由は、この検定（資格付与）制度が、現に養成機関を開設して養成事業をてがけていた有力会員から、積極的な支持を得られなかったことにあった。すなわち「この協会が法人組織ではない」と異議を申し立て、「資格証明を与えるような権限はない」と指摘する意見には、E. H. アーノルドのみならず、ポッセ（B. R. Posse）や、H. ニッセンも基本的に同様であ

り、彼らは当初から、計画の実施には慎重に対応するように発言していた（¹⁶⁾ p. 184）。

自らが師範学校を開設し、教師養成を手がけていたような、有力な体操指導者の立場は、専門職にふさわしい学位の論議では他の体操教師と共に医学博士に反対する一方で、協会の検定制度の計画に関しては自らの経営者としての利害に執着していた。こうした自らの安全の体系を守ろうとした彼らの選択は、その後の論議の経緯に、ひとつの屈折を与えることになったとみてよい。

体育振興協会期の最後にあたる第十三回全国大会（1903年）では、師範学校部門における体育専門職関連の発表は、体育教師論に限定した彼らの資質の問題へと明白に傾斜しつつあった。こうした論議がまた、彼らが経営する体育師範学校へのニーズや問題改善を前提に進んでおり、したがって論議は、体育の進歩や発展を期待しつつも、概して体育教師に固有で特殊な側面を強調させる論議を引き出す方向をもたらしていた。こうした方向はむしろ一方で、体育教師である前に（他教科と同様の）教師であるべきだと主張していた会員の声を放置する傾向をもたらすものになった。

「体操教師は、まず最初に教師であるべきであります。もしも可能であれば、体操教師は、評判の高い師範学校の卒業生の資格、少なくとも、公立学校の初等教育程度を教えるために基本的な要件を備えているべきであり、また確かに一般の他教科に関する情報を十分に知らされている必要があるのです（Krohn⁹⁾ p. 157).」たとえばクローン（W. O. Krohn）は、同じ1903年に「体操教師養成における心理学の価値（Krohn⁹⁾ pp.152-163).」で、いわゆる教師としてのリベラル・アーツを重視して、体育教師の学術的資質の向上に触れる主張をしていた。

注

- 注1) American Association for the Advancement of Physical Education. この組織の1903年以後における基本的名称の変更は、以下の通り。American Physical Education Association (1903-1937), American Association for Health and Physical Education (1937-1938), American Association for

Health, Physical Education and Recreation (1938-1974), American Alliance for Health, Physical Education and Recreation (1974-1979), American Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance (1979-).

注2) 1885-1894年までの“Proceedings of the AAAPE”と、1895年の“Report of the Tenth Annual Meeting of the AAAPE”と、さらにそれ以降の“American Physiccal Education Review (APER)”を指す。なお本研究ではYMCA訓練学校(現国際YMCA大学)の図書館所蔵の史料のマイクロフィルム版を用いている。

注3) “mechanotherapy”という用語は整形外科領域でもちいられる用語であり、一般的には「器械療法」と訳される。しかしながら体育専門職と関連づけられた本研究における当時の論議の中では、この用語はむしろ器械を用いた「運動療法」という意味が明白であり、またマッサージや用具を用いての運動療法の意味合いも強調されていた。こうした意味では「運動療法」と翻訳可能であった。本研究では、今日一般化している「器械療法」の訳語と区別する意味で、当時体育の領域で論議されたこの用語をカナ書きで「メカノセラビィ」と表記することにした。

注4) 会員名簿から確認できた数字に基づいて一年あたりの学位起債者数を調べた結果、たとえば1896-1903年当時の世紀変わり目には、年平均143名程度の学位記載者(全会員のおよそ5人に1人に相当)がいた。そのうち130名程度が博士レベルの称号を記載していたが、九割以上が医学博士であり、毎年およそ120名近くが当時におけるその実数となっていた。

注5) J. G. W. ツェンダー博士(J. G. W. Zander, M.D., 1835-1920)の名前に由来。1857年頃にストックホルムで最初の「ツェンダー機器利用医学研究所」を創設した。100近い種々の治療器械を考案、いわゆる「器械療法」(mechanotherapy)の体系を完成した。当時のアメリカには、彼の医学研究所と同様の「機器利用医学研究所」が、ボストンやフィラデルフィアやバルチモアなどの各地に開設されていた。McKenzie, R. T., “Exercise in Education and Medicine.” W. B. Saunders Company, 1910, p. 60.

文 献

- 1) Dalen, V., Mitchell, E. L. and Bennett, E. L. (1953) “A World History of Physical Education.” Prentice-Hall Inc. pp. 398-399.
- 2) Gulick, L. H. (1891) “Physical Education in the Young Men's Christian Association” [Proceedings, Its Sixth Annual Meeting Held in Boston, Mass., April 3 and 4, 1891, Andrus & Church, Ithaca].
- 3) Gulick, L. H. (1890) “Physical Education; A New Profession.” [Proceeding; Its Fifth Annual Meeting held at Cambridge and Boston, Mass., April 4 and 5, 1890].
- 4) Hackensmith, C. W. (1966) “History of Physical Education.” Harper & Row, New York, pp. 517-518.
- 5) Hanna, D. (1903) “Present Status of Physical Training in Normal School.” [APER., Vol. VIII, pp. 293-294].
- 6) Hartwell, E. M., Wood, T. D. and Hall, C. L. (1894) “Report Presented before the Section on Litterature and Bibliagraphy.” [Report of the Nineth Annual Meeting, held in New Haven, Conn., Press of Clarence H. Ryder, New Haven, Conn., pp. 81-87].
- 7) Hitchcock, E., Jr., Secretary (1890) “Report of the Fifth Annual Meeting.” [Proceeding; Its Fifth Annual Meeting held at Cambridge and Boston, Mass., April 4 and 5, 1890, p. 4].
- 8) Hopkins, C. H. (1951) “History of YMCA in North America.” Association Press. pp. 175-176.
- 9) Krohn, W. O. (1903) “The Value of Psychology in the Preparation of a Teacher of Gymnasitcs.” [APER, Vol. VIII, No. 3, p. 157].
- 10) Lee, M. (1983) “A History of Physical Education and Sports in the U.S.A.” John Wiley & Sons, pp. 111-113.
- 11) Lee, M. and Benett, B. L. (1960) “This is Our Heritge: 75 Years of the American Association for Health, Physical Education and Recreation.” JOH-
PER, April, Vol. 31, pp. 25-85.
- 12) Rice, E. A. and Lee, M. (1958) “A Brief History of Physical Education.” Ronald Press, New York, pp. 314-315, pp. 374-376.
- 13) Sargent, D. A. (1891) “Is the Teaching of Physical Training a Trade or a Profession?” [Proceedings; Its Sixth Annual Meeting Held in Boston, Mass., April 3 and 4, 1891, Andrus & Church, Ithaca].
- 14) Weston, A. (1962) “The Making of American Physical Education” Appleton Century Crofts, pp. 36-41.

- 15) "Comittee on Resolutions" [APER, Vol. IV, No. 2, 1899, p. 198].
- 16) "Discussion: Certification of Gymnastic Teachers" [APER, Vol. IV, No. 2, 1899].
- 17) "Discussion: School Hygiene and Mechanotherapy" [APER, Vol. IV, No. 2, 1899, p. 157].
- 18) "Mr. C. Rathmann's Address" [Proceedings; Its Third Annual Meeting at Brooklyn, N.Y., Nov., 25, 1887, Rome Brothers, Steam Printers Brooklyn, pp. 25-26].
- 19) "Official Announcements" APER, Vol. III, No. 4, 1898, p. 307.
- 20) "Reports from Societies: New York Physical Education Society" [APER, Vol. III, No. 2, 1899, pp. 78-80].
- 21) "Reports of the Council" [APER, Vol. IV, No. 1, 1899, pp. 88-89, p. 92].
- 22) "Report of Committee of Nine" [APER, Vol. VI, No. 3, 1901].
- 23) "Wednesday, April 5, Morning Session" [APER, Vol. IV, No. 2, 1899, pp. 148-149].
- 24) 小田切毅一 (1995) 20世紀への転換期におけるスポーツに対するアメリカ体育家のメンタリティー, スポーツ史研究, スポーツ史学会編, 第8号, pp. 1-14.

(平成7年11月10日受付)
(平成8年3月13日受理)